

縄文時代晩期の日本海地域における身体表象文化の研究—耳飾を例として—

吉田 泰幸

はじめに

縄文時代晩期（約 3,000 年前）の日本列島中央部において、土でできたピアス状の耳飾が盛んに作られました。金属器のない時代、こうした耳飾は大きくならざるを得ず、これらは最低でも直径 1cm ほど、大きいものでは直径 10cm 近くに及ぶこともあります。土偶の耳に「耳飾」と同じ模様が表現されていたり、人骨の耳の辺りから出土したり、人骨はなくても頭ぐらいの間隔をおいて対で出土したりすることもあるので、耳飾として間違いないでしょう。そうした耳飾を身につけるためには、耳たぶに大きな孔をあける必要があり、そうした姿に対しては、近代化された生活を送る我々現代人の目からすれば、「未開」、「野蛮」、「原始的」というレッテルを安易に貼付けてしまうかもしれません。しかし、同じように 1960 年代という近い過去において、耳たぶに大きな孔をあけて身につける耳飾を用いていたことで知られるケニア・バリング湖周辺の諸部族は、耳飾のすこしの差異で部族の差異をあらわしていたことも報告されています。このように、一見ただけでは理解不能な「他者」の身体表象（難しい言葉ですが、様々な加工によって、何か他のことを表すようになった身体、ぐらいに考えておいてください）には、それらが用いられている社会なりの意味が埋め込まれていることが多いようです。縄文時代という遠い過去の日本列島において用いられていた耳飾に対しても、そうした眼差しをむけてみる必要があるでしょう。

では、どのようなアプローチで縄文時代晩期の文化的・社会的な意味合いを読み解いていけばよいのでし

ょうか。この点については、すでに多くの研究者によって方向性が打ち出されています。それは、耳飾の文様に着目することです。その文様がある地域に特徴的なものであれば、各地域を基盤とする集団にある程度対応するのではないか、つまり耳飾という身につけるモノの文様が、各小地域集団そのものの象徴として機能していたのではないか、ということです。

この研究は、こうした視点から、日本海地域に特有の耳飾文様が見いだされるかどうかを検討したものです。

縄文時代晩期耳飾の特徴

この種の耳飾が研究されはじめたのは古く、1940 年代の初めにはおおまかな様子が明らかになっていました。この先駆的な研究者は樋口清之という方です。後に『梅干しと日本刀』などの著作が有名となり、「うめぼし博士」と呼ばれた方です。この方がすでに、現在縄文時代と呼ばれている時代でも終わりの方、そして東日本において盛んにこの種の耳飾が作られていることを明らかにしていました。樋口博士は耳飾を大きく A（椎骨形とそのバリエーション）、B（栓棒形、樋口分類の B 2 は除く）、C（碗形）の 3 類に分けていました。それをもとに、1940 年代に比べ

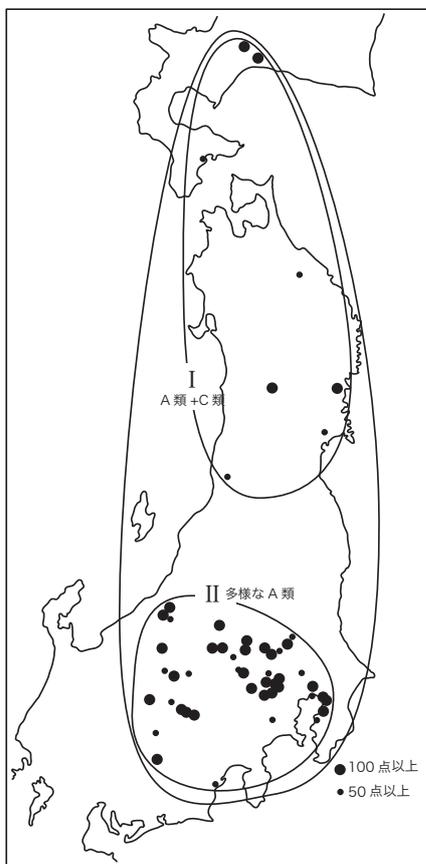


図1 縄文時代晩期の耳飾の分布

て急激に資料が増加した現時点での、縄文時代晩期前半の分布を示すと図1のようになります。次の二つの分布域を形成するようになる、とまとめられます。

I 地域：北海道西南部から東北北部 A 類 + C 類

II 地域：関東地方および中部高地 A 類

関東地方および中部高地、としましたが、その広がりには日本海地域にも及んでいます。現在上越市とされている地域に、耳飾を多量に出土する遺跡が複数あります。この研究では、この地域出土の耳飾の詳細な検討と、その成果を元にした、II 地域に含まれる他の地域と比較して、日本海地域に独特の耳飾文様があるかどうか、ということ調べました。

日本海地域における耳飾の検討

以下の3遺跡について、詳細な検討をおこないました。具体的には、耳飾1点1点の写真撮影を入念におこないました。

- ・新潟県妙高市（旧妙高村）葎生遺跡
- ・新潟県上越市（旧中郷村）小丸山遺跡
- ・同（同）籠峰遺跡

妙高市雪国民俗資料館において、葎生遺跡出土耳飾の調査をおこなった際には、今まで報告されていなかった耳飾もみつけることができました。次に、上越市片貝縄文資料館においては、籠峰遺跡出土耳飾と、小丸山遺跡出土耳飾について、詳細な検討をおこないました。籠峰遺跡から出土した耳飾は、新潟県長岡市にある新潟県立歴史博物館にも所蔵されており、こちらについても調査をおこないました。これらの結果、合計で1,000点以上の耳飾のデータを得ることができました。

文様の検討をする前に、文様以外の要素である形態についてふれておくと、先にA～Cと耳飾を分類しましたが、今回データが得られた耳飾は全てA類、椎骨形とそのバリエーションということができ、図1中のII地域に含めることは問題がないことを確認できました。

本題の文様についてですが、小さな破片すぎて文様の構成がよくわからないものもある中、文様が有るものと無いものの比率は確実に出てきますから、そこから何が言えるか、などの検討もおこないましたが、そうした点は割愛します。また、文様構成がよくわかるものは全部で22種類の文様に分類できましたが、その詳細も煩雑になりすぎるので割愛します。ここでは、得られたデータから分類できた各文様1種類ずつに対して、図1のII地域の中で似たものが他の地域にあるかどうか、ということ調べたので、その検討結果の特徴を簡単に述べたいと思います。

分けられた文様の中には、日本海地域とその近くにしかないものもあれば（図2）、遠くII地域の反対の端、千葉県や栃木県の遺跡から出土した耳飾の文様と同じものもありました（図3）。

そうした図1中II地域における耳飾文様の分布の傾向を、次のようなパターンにまとめました。

パターンA：日本海地域のみみられるか、それ以外の地域には数点しかみられない（図2）。

パターンB：日本海地域以外にも広くみられるが、関東地方と比較した場合、分布の中心は中部高地にある。

パターンC：日本海地域以外にも広くみられるが、中部高地と比較した場合、分布の中心は関東地方にある（図3）。



図2 分布パターン A (日本海地域のみにもみられるか、それ以外の地域には数点しかみられない) の一例

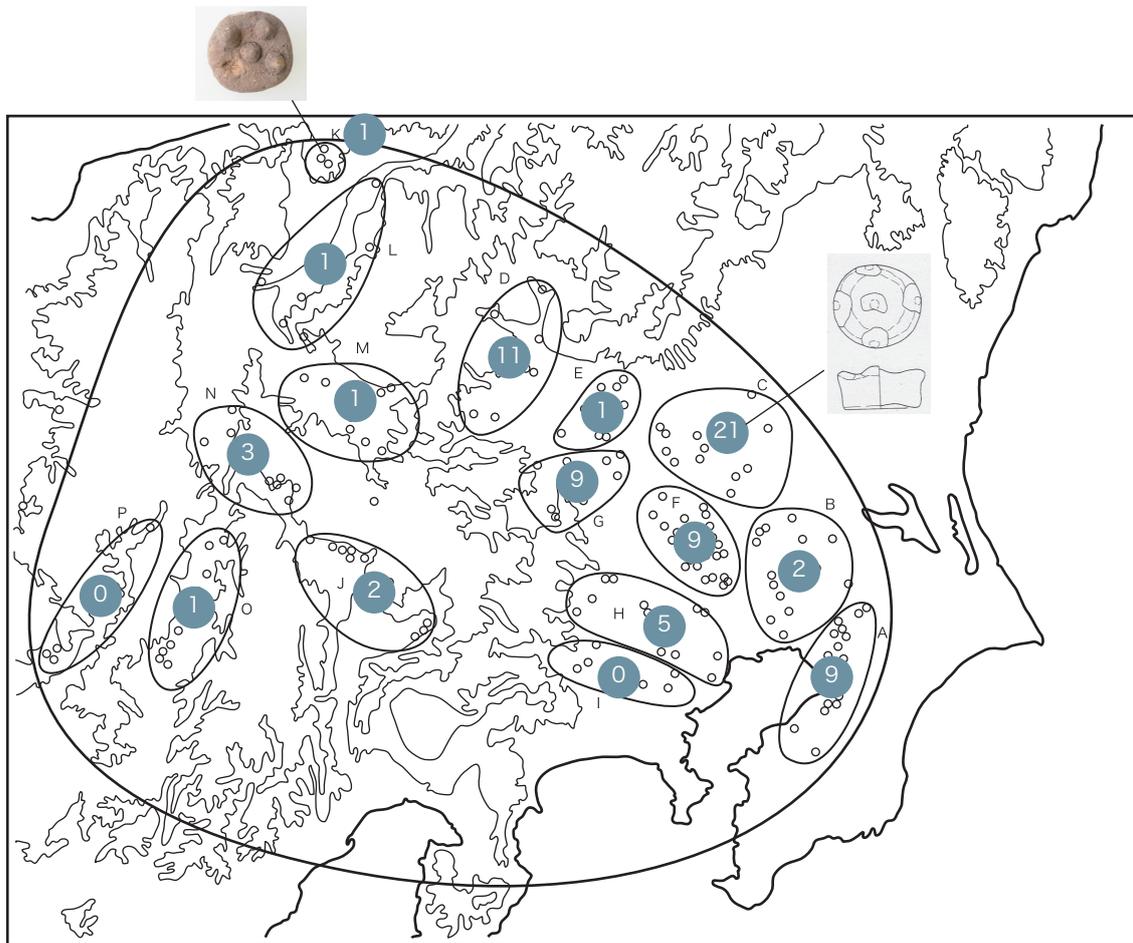


図3 分布パターン C (日本海地域以外にも広くみられるが、中部高地と比較した場合、分布の中心は関東地方にある) の一例

パターンD：広く分布し、分布の中心がどこにもない。

詳しい検討をおこなった日本海地域における分布パターンごとの確認点数は、 $A > D > B > C$ という結果になりました。

この結果から、わずかながら考察をおこなってみたいと思います。

考察

ここでは、ある人が生まれ、成長していったときに、自らのルーツである集団での約束事にしたがって、どのような文様の耳飾をつけるのか、ある程度決まっている、という前提で考察を進めたいと思います。もちろんこの前提自体に検討が必要で、様々な議論があるのですが、ここではその詳細は省きます。

まずパターンDが示すコトから考えてみると、

1：広い地域で共通する美意識のようなものが存在していたため、どこが中心地と言えない文様があると考えられます。

次にパターンB・Cが示すコトを考えてみると、

2：ルーツが日本海地域ではなく、その他の地域にある人々が存在していたと考えられます。CよりもBが多いということは、交通手段など発達していなかった当時、やはり距離的に近い地域にルーツをもつ人が多かった、と言えるでしょう。

次にパターンAが最も多かった、ということが示すコトを考えてみると、

3：日本海地域に根ざして生活を送っている集団に属する人々が、独特の耳飾文様でその集団のアイデンティティを獲得していた、と考えられます。

1～3から、本地域は「耳飾文化圏」とも言える関東地方・中部高地のネットワークの一部に身をおきつつも、本地域に根ざして生活を送り、そのコトを身につける耳飾文様に表象させていた、とまとめることができます。

今後の課題

この研究で得られたノウハウを生かしつつ、他地域でも同様の検討をおこなう必要があるでしょう。日本海地域で詳細な写真データを得た後、他地域との比較は写真でおこなった場合もあれば、図面でおこなった場合もあるからです。日本の考古学者はモノを図面という方法で情報化する、ということについてよく訓練されているので、文様の再現性は高いのですが、それでも写真同士を比較することが望ましいでしょう。また、各遺跡から出土した耳飾全てが報告され、共有されている訳ではありません。こうした問題を解決することで、日本海地域独自の文様が存在する、という今回の指摘をより確実に示すことができると考えられるのです。

また、考察では「・・・約束事にしたがって・・・という前提で」と述べた部分があります。すでにいない大昔の人々の「約束事」を復元するのは容易ではありませんが、「とき・ところ」が変わっても共通する部分をヒトは持っていますので、この研究のような問いかけも無駄ではないでしょう。